

韓国における家禽と野鳥の H5N8 型高病原性鳥インフルエンザに関する  
‘鳥インフルエンザと野鳥に対する科学的タスクフォース’ 声明

2014 年 1 月

主要メッセージ：

1. 高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生はほとんどの場合家禽の生育システムと流通・販売経路と関係している。
2. H5N8 型 HPAI が最近韓国の家禽で生じ、家禽および野鳥の死因となっている。
3. 家禽産業と共に、野鳥の大量死、特に注目すべきはトモエガモの大きな群れの死因になっている可能性があることである。
4. 現在のところ野鳥がこのウイルスの源であるという証拠はなく、野鳥はウイルスの媒介者ではなく犠牲者と考えべきである。
5. ‘鳥インフルエンザと野鳥に関する科学的タスクフォース’ は国連環境プログラム・移動性野生動物種に関する条約(UNEP/CMS)および食糧農業機関(FAO)と共同で当局並びに団体に以下のことを要請している。
  - a. このウイルスの真の発生源と家禽と野鳥内での伝染のメカニズムを究明するために徹底した疫学上の評価を行うこと
  - b. 感染源に係らず、他の家禽農場や野生動物に病気が広がるリスクを最小限に抑える目的で既に病気が発生した農場に対する病害対策を重点的に取り組むこと
  - c. 野生生物と家禽の接触を防ぐために、感染した農家と近隣農家のバイオセキュリティを確保すること
  - d. 野鳥にのみ注意を集中することは、重要な資源を効果的な病気抑制から誤った方向に導き、保護活動の成果にマイナスとなり、生物多様性を失う結果になりうることを認識すること

現状：

韓国は 2014 年 1 月 16 日ソウルの南西 300km に位置する全羅道ゴーチャンのアヒル農場で H5N8 型高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)が数多く発生したという第一報を発表した。これらの発生に続いて多くの野鳥が感染により死んだことが報告されている。これまでに数十羽のトモエガモとそれより少数のヒシクイが死に、そのうちの数羽が検査によりこのウイルスの陽性だった。H5N8 型インフルエンザ株は以後少なくとも 17 の他の農場でも特定され、現在、他の疑わしいケースでも検査が進められている。64 万羽を超える家禽が既に殺処分され、更に数十万羽が処分されることになっている。

## このウイルスはどこから来たのか？

これまでのところ、世界的な野鳥調査活動によってもこの鳥インフルエンザ型を野鳥から検知されたことはない。今回の事態と関連するウイルス源を明らかにする調査が行われている。ウイルスが野鳥から拡散したと考える人は多いが、今日までこの主張を支持する疫学的な証拠はない。ウイルスが野生のヒシクイ、トモエガモおよび数十万羽というトモエガモの群の場で死亡原因であることを示したので、もしウイルスが冬の間にこれらの群の中で循環していたとするなら、既に遥かに多くの数の野鳥の死が起きていたと考えられるだろう。ところが、トモエガモが 2013 年の秋に韓国に渡って来た時には、農場でのインフルエンザ発生が始まるまでは、病気の証拠はなかった。野鳥から HPAI ウイルスを検知するのは、飼育農場での家禽および家禽の流通・販売経路での検知と比較して極めて稀である。流通・販売経路では低病原性ウイルスが突然変異により高病原性の型に進化し、定着し、急速に拡散する機会があるものと考えられている。家禽、家禽製品、人および設備の現在感染している農場内および農場間での移動と、廃棄物の広範囲の環境への漏出も他の家禽や野鳥へのウイルスの拡散を促進する可能性がある。

## どのような活動を行うべきか？

### 家禽農場と市場

FAO および OIE（国際獣疫局）の勧告によれば、実施されている H5N8 の病害対策の大部分は家禽農場と鳥市場に集中するべきである。それには検疫、根絶(stamping out)、厳格なバイオセキュリティ、清掃と消毒、通商および運搬の制限などが含まれる。もし適切に行われるならこれらの対策は病気の発生を抑えることを助け、ウイルスの拡散を防ぐよう機能する。

### 野鳥

韓国はトモエガモの主要な越冬地であり、この賑やかに鳴くカラフルな鳥の大群は世界的にも有名な野生生物の壮観な光景を提供する。現在、トモエガモや他の野生生物の間に高いレベルの大量死の可能性がある。野鳥を守り彼らがウイルスの拡散に関与するのを防ぐために、家禽農場で、また、環境汚染と特に湿地地域での野鳥へのリスクを減らすための病害対策作業の間に、あらゆる取り組みを行うべきである。

野鳥を鳥インフルエンザに感染した農場に近づけない手段、例えば餌などの誘引物を減ら

すなどや、場所が適切なら感染農家の直ぐ近くには鳥を脅す装置（旗など）などの妨害物を増やすなどを行うべきである。感染農家以外の場所では野鳥がリスクの低い場所に留まったり、採餌が出来るように野鳥への攪乱を最小限にするべきである。

鳥インフルエンザの抑制方法として鳥を殺すことは考えるべきではない。これは重要なことから注意をそらすだけであり、実行困難であり、非効率で、更に全ての主要な動物の健康機関のアドバイスに反することである。野鳥の殺処分は‘渡り性動物種に関する条約 (CMS)’ とラムサール条約による野鳥保護の誓約に反することでもあり、また国際条約違反になる可能性がある。同様に、消毒薬を自然環境に（湿地など）散布することも、これがウイルスに効果があるとは考えられず、むしろ野生生物や漁業に損害を与えることから勧められない

前回の H5N1 型 HPAI の発生時に起きたようなウイルスの導入と拡散の原因を野鳥のせいだとする偏った非難は、集中的な防疫対策活動を弱め、ウイルスの拡散の可能性を招く恐れがある。メディア、学識経験者、人と動物の健康機関は、野鳥の役割と鳥インフルエンザについて考える時に責任を持って行動し、証拠が支持しない場合にはウイルスの元を野鳥だとする暗示を避けることが求められている。

#### **鳥インフルエンザと野鳥に関する科学的タスクフォース：**

国連環境プログラム・移動性野生動物種に関する条約 (UNEP/CMS) および食糧農業機関 (FAO) 共同開催の ‘鳥インフルエンザと野鳥に関する科学的タスクフォース’ は 2005 年に設立され、コミュニケーションと協力のネットワークとして活動をしており、現在入手が可能な証拠に基づきバランスの取れた意見を進めつつ、AI の疫学における野鳥の役割と鳥インフルエンザの野鳥への影響を見直す作業を続けている。同タスクフォースのメンバーとオブザーバーには WHO、OIE、FAO、CMS、ラムサール条約、AEWA、ウエットランド・インターナショナル、ワイルドファウル&ウエットランド・トラスト、バードライフ・インターナショナル、王立獣医カレッジ、エコヘルス連盟、国際狩猟動物・野生生物保護会議などが含まれている。

その他の情報：

(省略)